オープニングセミナー 2



ACL 再建術後における理学療法評価：評価結果から臨床推論への展開

順天堂大学保健医療学部理学療法学科[1)],
東京科学大学病院スポーツ医学診療センター[2)]

大路 駿介[1,2)]

前十字靭帯（ACL）再建術後の理学療法において、スタンダードな検査・測定は臨床現場で広く実施されている。しかし臨床現場で重要なことは、検査・測定を実施することそのものではなく、その結果から患者の全体像を把握し評価することである。すなわち、運動療法を進めてよいか、立ち止まって治療に専念すべきか、あるいはその配分を調整するかを判断することである。本講演では、ACL 再建術後理学療法における検査・測定と評価を、異なる 2 つの目的ごとに整理する。

一つ目は、日々の運動療法と治療、ならびに活動量を調整するための身体機能評価である。この評価は、臨床推論、運動処方、再評価のサイクルである。現在の患部および患部外のコンディションの把握をベースに、①前回処方したエクササイズや活動量が適切であったかの評価、②今後追加・変更しうるエクササイズ選択肢の規定、および③膝前部痛等の発症予防に向けたスクリーニングという 3 つの機能に分かれる。具体的には、身体機能として腫脹、疼痛、関節可動域、膝蓋骨可動性・トラッキングおよび膝蓋下脂肪体をはじめとする軟部組織の柔軟性、大腿四頭筋筋力、股関節筋機能などを取り上げる。また動作場面として、動作中のアライメントコントロールも対象とする。これらは確立された基準を欠く項目もあるが、所見をもとに客観的に判断することが、感覚的な臨床推論を系統化する第一歩となる。

二つ目は、段階進行およびスポーツ復帰に向けた準備状況を確認するための評価である。ここで用いられるホップテストやジャンプ着地テストを、検査・測定バッテリーとして列挙するのではなく、各テストの特性から、力発揮、減速、方向転換、着地という 4 つの動作要素に整理する。この整理により、テスト選択の意図と結果の解釈が明確になり、復帰準備の確認における臨床推論を具体的に実践できる。

検査・測定と評価を整理することは、経験的に蓄積された臨床推論を言語化・数値化し、患者への治療・指導はもちろん、医師を含めた他職種との共有、ならびに後進の指導に活用するための足がかりとなる。

略歴

理学療法士、医学博士、認定理学療法士（スポーツ理学療法）

【職歴】
2011 年～2012 年　岡本整形外科　リハビリテーション科
2012 年～2023 年　東京科学大学病院　スポーツ医学診療センター
2014 年～2023 年　東京科学大学　スポーツサイエンス機構　スポーツ医歯学診療センター
2024 年～現在　　東京科学大学病院　スポーツ医歯学診療センター　非常勤講師
2024 年～現在　　順天堂大学保健医療学部理学療法学科　助教

【学会・委員会活動等】
2019 年～現在　公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学）
2019 年～現在　公益財団法人日本スケート連盟　医学スタッフ
2024 年～現在　一般社団法人日本スポーツ理学療法学会　情報戦略・IR 委員会　委員長